

建築空間手法論研究

研究代表者 古谷 誠章
(創造理工学部・建築学科・教授)

1. 研究課題

近年日本社会において情報技術の発展、産業構造の変化による人口移動、地域固有の生活・産業の減少など様々な要因から、各地域・住民が継承していた伝統・文化・生活の記憶が途絶え始めている。本研究では、「プロポーシオン」「ディテール」「テクスチャー」の3つのキーワードを建築空間の端緒として、都市や建築自体が世代を超えた記憶装置となり得る空間の設計手法を研究と提案を行う。これにより、都市や建築はそこに暮らした人々の記憶が折り重なり、有形無形の名残がそこに刻まれ、残されることで、後になってそれを思い起こす縁となり、また建築がその実物としてこの世界にあり続けることで、過去の記憶を紐解くことも可能であると考え。

本研究では、実際に建設企業と協働することで、建設企業側では本研究により提案された建築空間手法をもとにその地や風土に根ざした「記憶装置」としての建築の実践可能性を得られ、また研究者側は社会に潜む数多くの問題を直接題材とすることで、よりその地に根ざした実践的な空間提案へとつなげ得るものとなる。こうした双方向性の強い建築設計における産学連携のシステムにより、どの場所も同じ風景になってしまっている今日の都市空間、建築空間の諸問題を抜本的に改革する可能性がある。

2. 主な研究成果

- 2-1. 次世代医療施設の研究
- 2-2. 森が学校計画産学共同研究会
- 2-3. オフィス等の設計における産学共同プロセスの研究
- 2-4. 菊竹清訓資料の収集にむけた調査・収蔵計画の情報収集

2-1. 次世代医療施設の研究（医療施設の実プロジェクトにおける研究）

2-1-1. 「病院」×「薬局」×「健幸」複合施設の都市型モデルの構築

地域のコミュニティ軸に隣接し、区役所として親しまれてきた立地特性を活かし、地域の中で健康で安心して暮らす「健幸」まちづくりをめざす。また、「健幸」まちづくりを地域や全市へ広げていくための、「病院」×「薬局」×「健幸」複合施設の都市型モデルとしていく。

2021年度のストリートメディカルシティの研究もふまえ、「健幸創出ベース」を中心として地域交流促進や健康増進への取組がどのような内容が考えられるか研究していく。

2-1-2. 健幸まちづくり～健幸創出ベース～

本計画の構想から、健康サポート薬局、まちの保健室、地域の人が気軽に足を運ぶ仕掛け、段差を活かした仕掛け等にテーマを分類し、それぞれに提案をしていく。

2-1-3. 調剤薬局周りの待合空間の提案

本計画内での、調剤薬局まわりの待合空間を「みんなの居場所としての健康薬局」として設計を試みる。本計画での事業コンセプトが「健幸まちづくり」であり、提案している薬局は「健幸」の中核を担う施設である。「つながり」を具体的な空間の提案にするにあたり、コンセプトを「大きな輪で繋がる健康空間」とする。



Fig1. 模型写真



Fig2. 薬局まわりの待合空間

2-2. 森が学校計画産学共同研究会

2-2-1. 研究テーマの細分化と展開

自然環境を人間の本質的な人格形成に必要な不可欠なものとして定義付け、子ども達の育成環境を整えるために必要な「都市・建築・教育・環境」の相互関係を見直し、来るべき日本全国、世界各地に必要な不可欠となる『森が学校』のあり方を研究した。「都市・建築・教育・環境」研究領域を中心に、学内外、研究会員による総会・講演会を各1回、研究定例会を11回開催した。本年度は、下記の研究項目に従い、主にA,Bについて研究を進めていった。

- A. 「森が学校」の環境づくり
 - A-1. 森の中や校内に設置する教育施設・設備の研究
 - A-2. 自然と融合した校舎の研究
 - A-3. 校内環境(校舎・教室のデザイン)が子どもに及ぼす身体的影響の調査
 - A-4. 「森が学校」の校舎、学校林のあり方の研究
 - A-5. 全国において地域全体を学校と捉え、計画する研究
- B. 「木をつかう」世代育成と保護者育成
 - B-1. 木造の校舎や家具が子どもの心身に及ぼす効果の研究
 - B-2. 木を使用することの意味を知り、心地良さを体感する研究
- C. こどもに与える影響の調査
 - C-1. 公立の調査対象校における比較調査・研究
- D. 推進組織、組織体制の調査・研究
 - D-1. 全国への展開へ向けた、PPP (Public Private Partnership) のあり方の研究
- E. 「森が学校」の教育の在り方
 - E-1. 自然と融合した授業の調査・研究

2-2-2. 研究会定例会・総会

学内外、研究会員による総会・講演会を各1回、研究定例会を10回開催した。総会・講演会は対面形式で実施し、オンラインでのリアルタイム配信も行った。研究定例会はコロナ禍を鑑みて対面とオンラインのハイブリッド形式で実施した。研究定例会では毎回話題提供者を決めてショートレクチャー形式で発表・討論の時間を設けた。



fig.1 公開講演会の様子

2-2-3. 東松島うまのひづめ展望デッキ補修工事の活動

過去に研究会で製作した東松島「復興の森」のうまのひづめ展望デッキの補修工事を行った。経年劣化のため安全面において危険な状態になっていたデッキを、再び地域の方の居場所として再生させようと動き出した活動として、実際に現地で2週間かけて学生の手作業によって施工をした。その過程で、馬による木材の運搬や、地域の小学生を巻き込んで一緒に作業をするなど、歴史的背景や地域とのつながりを意識して行った。



fig.2 補修工事前のデッキの様子



fig.3 補修のため一度デッキ材を外した際の様子



fig.4 補修工事の様子



fig.5 木材を馬搬している様子



fig.6 地元の小学生と共に作業している様子



fig.7 やすりがけ作業の様子



fig.8 新調したデッキ材



fig.9 塗布剤乾燥中



fig.10 竣工写真



fig.11 完成お披露目会の様子

2-2-4. 東松島ベンチ製作・森林散策ワークショップの活動

東松島「復興の森」のうまのひづめ展望デッキの補修工事の際に余った木材を活用し、地元の宮野森小学校の学生とその保護者を対象として、小さなベンチを製作するワークショップを行った。

小学生を対象にしていたことから、作業は簡単なもののみとするため、事前に大学院生で念入りに準備や下作業をした。

ワークショップの場所は、復興の森のツリーハウス（アファンの森財団製作）前広場で行った。同時に、C. W. ニコル・アファンの森財団の大澤氏による復興の森の散策もプログラムに盛り込み、子供たちのためのプロによる自然教育にも貢献した。

ワークショップの準備や当日の運営などにあたり、地元のまちづくり団体の「H×Imagine」を巻き込んで行い、また当日は地元の方々に炊き出しをしていただいた。

完成したベンチは、宮野森小学校に寄贈し、子供たちに使ってもらっている。



fig.12 ワークショップポスター



fig.13 ワークショップの事前準備



fig.14 ワークショップ当日：準備体操の様子



fig.15 復興の森散策中の様子



fig.16 ワークショップ当日：展望デッキで寛ぐ様子



fig.17 ベンチ組み立て時の様子



fig.18 組み立て時（大学生と小学生のペアで行った）



fig.19 完成したベンチを運搬している様子



fig.20 炊き出しの様子



fig.21 昼食時の様子



fig.23 ワークショップ集合写真

2-3. オフィス等の設計における産学共同プロセスの研究

清水建設と手を組み、オフィスを中心とした施設設計の建設計画の考え方、デザイン等について具体的方法論を産学共同で研究し、双方の活動に役立てることを目指している。

今年度は、「地域と企業が活かしあうかたち」を題とした。今回、企業は自社の独身寮を建設予定ですが、建設に当たっては敷地を市民に開放し、企業と地域を媒介する機能・空間・コトづくりを求めています。建築や空間はそれ自身が目的ではなく、人々が何かをしたい、こうして生きたいという動機につながるプログラムを想像することは、これからの建築の可能性を考えるうえでとても重要なことだと考える。社会的課題も多岐である。カーボンニュートラルを含めたエコロジカルフットプリントの縮小、気候変動に伴うゲリラ豪雨や災害時への対応、新しいライフスタイルを見据えた働き方も企業には求められている。今の社会が抱える課題に向き合いながら、一企業と地域が繋がる仕組みの提案を求められている。

そのために、今の社会が抱える課題に向き合いながら、一企業と地域が繋がる仕組み、そしてこの場所に、独身寮に加えどんな建物や空間を構えれば人々が幸せになれるか？未来を見据えた提案をしてきた。

2022年度 清水建設 産学共同デザインコンペティション 最終講評

【地域と企業が活かしあうかたち】

DATE: 2022.12.06 15:00~17:00

PLACE: ミチラボ (メブクス)

〒135-0061 東京都江東区豊洲6丁目4-3 4

学生提案シート





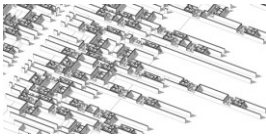


<p>1 M1 内田ひかり、菅家純 M0 土江祐歌</p> <p>マチの時刻表-京と地域を繋ぐターミナル</p>  <p>佳作</p>	<p>5 M1 齊藤さやか、田嶋大地、北村彩夏、吉岡憲吾</p> <p>寺子屋の暮らし</p>  <p>最優秀</p>	<p>9 M0 高橋猛</p> <p>欠</p>
<p>2 M1 Liu Wenbiao, Man Yi, Gao Yuhan, Tang Ruishang</p> <p>Radial</p>  <p>佳作</p>	<p>6 M2 Ling Yijing M1 Zhang Suihan</p> <p>アパート101</p> 	
<p>3 M1 菅澤勇太、川俣悠</p> <p>伸縮壁で過ごす建築</p>  <p>優秀</p>	<p>7 M0 石川 航士朗</p> <p>rental-column building</p> 	
<p>4 M1 李珂竜 M2 キョウ ショウ ウシン</p> <p>スローループ</p>  <p>最優秀</p>	<p>8 M1 GRAND, Clemence Salome, MAS BAURIER, Adria</p> <p>欠</p>	

fig1. 最終講評会のレジュメ



fig2. 最優秀作品の提案



fig3. 最終講評会の様子

2-4 菊竹清訓資料の収集にむけた調査・収蔵計画の情報収集

建築家・菊竹清訓は、日本の近現代建築を牽引し、国内外で高い評価を得ている我が国を代表する建築家の一人である。菊竹清訓の設計資料の多くは株式会社情報建築（以下「情報建築」）に存在しており、現在は国立近現代建築資料館が図面資料調査と併せて、収集資料として段階的に受け入れている。本研究では、図面およびその他の資料全体を視野に入れた収集計画を立案する準備段階として、過去に行った現状把握に基づいて、今後どのように収集を行うかについての具体的な収蔵計画の立案に向けた調査と収蔵計画の提案を行った。併せて新たな収蔵場所の確保に関する可能性の検討を行った。また同時に、現在残されている菊竹清訓設計の建築の新たな資料作りとして建築実測調査を行った。

3. 共同研究者

根本 友樹（創造理工学部・嘱託研究員）
王 薪鵬（創造理工学部・講師）
宮嶋 春風（創造理工学部・助手）
池田 理哲（創造理工学部・助手）
嵐 陽向（創造理工学部・助手）

4. 研究業績

4.1 受賞・表彰

2022年度日本建築学会大会（北海道）建築デザイン発表会[テーマ部門]顕彰
斎藤信吾・池田理哲・西那巳子・茅野紗由・天野紗弥香・吉岡憲吾・ジョブラーン アフマド・古谷誠章：川崎市市民ミュージアムを未来につなぐ 川崎市市民ミュージアム活用提案日本建築学会大会学術講演梗概集 建築デザイン発表、2022、2022-9、pp. 406-407

5. 研究活動の課題と展望

5-1. 次世代医療施設の研究（医療施設の実プロジェクトにおける研究）

来年度は名古屋の地下街、大阪の緑道沿い病院をテーマに、地方都市における医療空間のポテンシャルやウェルビーイング等を探求していく。

5-2. 森が学校産学共同研究会

来年度は、東松島市を拠点として引き続きワークショップの企画とその効果の研究を行う。今後は、地域の方が主導となって子ども教育や地域おこしの活動を推進していくことが重要であり、研究会として、そのきっかけを作り、その後の継続的な活動を発起させるために、いかに地域との協力体制を敷いていけるかが課題だと考えられる。

また、今年度開催したワークショップの効果や振り返りをもとに、今後より自然環境教育的視点から影響の大きいワークショップの企画・提案につなげていきたい。

5-3. オフィス等の設計における産学共同プロセスの研究

本課題にて提案、議論された「企業と地域の繋がり」を表現した建築空間の様々な可能性を踏ま

え、実現するためのより詳しい計画、敷地条件の再読み取り、構造・設備等の問題は検討すべきである。また今後、時代の変化にどう対応するか、新たな空間のあり方をどう生み出すかを意識しながら、引き続き課題設定、事例調査、設計提案を行っていく。

5-4. 菊竹清訓資料の収集にむけた調査・収蔵計画の情報収集

菊竹清訓の現存する資料に関しては本研究での収蔵計画のもと、実際に然るべき機関で収蔵されることを期待している。設計した建築は解体の危機に晒されているものがあり、どう残すかを考える一方で、菊竹清訓研究を今後更に進めていくためにも建築実測や関係者へのヒアリング等の今しか作成できない資料作りも必須の課題と考えている。現存する資料に関しては本研究での収蔵計画のもと、実際に然るべき機関で収蔵されることを期待している。継続して建築実測・関係者へのヒアリングを行っていきたい。